

紹介

A. M. Piemontese,

Bibliografia italiana dell'Iran (1462-1982)

ヨーロッパの東洋学という言葉を聞いて、大部分の人がまず思い浮かべるのは英仏独のそれであり、イタリア東洋学を想起する人は極めて稀であろう。しかし、この国の東洋との交渉は、周知の如く、他のヨーロッパ諸国に比して教段早く始まり、今世紀に至るまで絶えることがなかった。近代的な東洋学研究活動も一九三三年のイタリア中東亜研究所 (Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente) 設立以来(この研究所の活動については、榎一雄「イタリア中東亜研究所のパキスタン・アフガニスタン・イランにおける考古学的調査」『東方学』五二・五三輯、一九七六、七七年に詳しい)、盛んに行なわれており、その動向は決して看過できるものではないのである。

このイタリア東洋学研究の重要な一翼を

担うナポリの東洋学研究所 (Istituto Universitario Orientale) は、十年来広く東洋学に関する著作を順次刊行しているが、本書はその十八巻目にあたるものである。題名が示す通り、編者ビエモンテ・ゼ氏が二十年以上の歳月をかけて、イタリア各地に点在する図書館などの施設で、イタリア人著者、編者の手になるイラン文明のあらゆる面に関する著作、研究のうち出版されたものを実地に調査し、その題目を分類、整理の上公開した一大偉業である。大部分はイタリア人によるイタリア語の著作であるが、イタリア人の書いたものなら英仏独など外国語を用いたものも含み、また外国人によるイタリア語の研究も勿論取り入れられている。収集された文献は、言語学や文学、歴史学などの根本資料として使用できる十五世紀のテキストから、これらを資料として用いた今世紀の学術研究に至るまで、実に六八八五点にのぼる。これにより、我々はイタリアにおけるイラン研究の全貌を知ることができるのである。

全体は次の如く十二章に分かれたれ、各章中では題目が出版年代順に並べられている。

I 書誌学、II 地理学、III 旅行記、IV 歴史

学、V 考古学、VI 美学、VII 言語学、VIII 文学、IX 哲学と科学、X 宗教学、XI イタリア、ヨーロッパ文学中のベルシア、XII 補遺。これに著者名索引が付され、二巻本全体で九四七頁に及ぶ巨冊となっている。

このうち歴史学に関するものが最も多く、二千点近くを占める。そしてこれが次の如く二九の節に分類される。1 歴史一般、2 先史時代、3 エラム文明、4 貨幣学、印章学、5 古代ベルシア史に関する古典史料(即ちヘロドトスなどのギリシア語史料)、6 古代ベルシア史と文明、7 メディア、8 アケメネス帝国、9 キュロス、10 ギリシアとベルシア、11 アレキサンダー大王、12 スキタイ、ヘレニズム、中央アジア、13 アルサケス朝・パルチアとローマ、14 ササン朝・ペルシアとビザンチン、15 イスラム帝国下ベルシア史と文明、16 カリフ治下のベルシア、17 周辺諸王朝と中央帝国、18 ティムール、ウズン・ハサンと十五世紀、19 サファヴィー朝・ソフイーと大トルコ、20 ナーデル・シャーと十八世紀、21 カージャール朝、22 パフラヴィー朝、23 イスラム革命、24 石油、25 クルドとクルド人問題、26 アフガニスタンと中央アジア問題、27 ウェネツ

イアとベルシア、28イタリアとベルシア、29他章の関連文献指示。

本書のメリットは挙げてゆけばきりがないのだが、そのうち最大のもの、疑いもなく編者による親切丁寧な仕事ぶりであろう。例えば、サファヴィー朝期イランを訪れたイタリア人旅行者の記録を調べる場合、これらはⅢ旅行記、Ⅳの19サファヴィー朝史、Ⅳの27ヴェネツィアとベルシアの三項目に分散して収録されており、ともすれば不統一で分かりにくい記載となりがちだが、本書では各項の最後に検索すべき他項目の番号がすべて記されており、参照しやすくなっている。何故 Della Valle の書はⅢとⅣの19の両方に収録され、Membre の報告は「ヴェネツィアとベルシア」の項にしか含まれていないのか、など分類上の問題がないわけではないが、いずれにせよ、このすべての項目を調査すれば関連文献の一切が把握できるよう工夫されているのである。これはこのように大部な文献目録を出す際必須の条件ではあるが、面倒な仕事を完遂された編者に敬意を表したい。

親切丁寧さについて付言すれば、今日我々が史料として用いる十五—十八世紀の文

献には、殆んどの場合いくつかの版本があるが、本書ではこれらの版本が出版順にすべて明示されており、これにより今後は、この種の文献を利用する際の面倒な初歩的手続を一切省略することが可能となった。

本書の如きビブリオグラフィは、何よりも正確さ、そして遺漏のなさが要求されるが、この点においても、筆者の見る限り本書には何の不満もない。同種の書として M. Saba, *Bibliographie française de l'Iran*, 3^e édition, Téhéran 1966 があるが、一瞥して両者の差は歴然としている。

筆者の如く歴史を専攻する者にとって、本書が史料の存在を調べる場合にも、またこれら史料についての研究や史料を用いた研究を行なう際にも利用することが出来、大変重宝なものである。今後イラン学を志すものにとって、本書は必要不可欠な工具となろう。イタリア東洋学恐るべし、というのが本書を手にとってみた筆者の偽らざる感想である。

(二巻、九四七頁、一九八二年、Napoli)
(羽田正 京都大学大学院生)

川崎寿彦 著

『庭のイングリッド』

——風景の記号学と英国近代史——

本書は、英文学者の著者が、一六世紀から一八世紀の英文学の中に描かれた庭、及び、それと関連のあるいくつかの空間イメージを通して、英国近代史、並びに、英国人の精神の近代化の軌跡を追求した書である。かつて著者は、一七世紀中葉に活躍した詩人アンドリュー・マーヴェルの庭園詩を扱った『マーヴェルの庭』と題する著作において、一六五〇年代の初頭が英国近代史の大分水嶺であったことを明らかにした。本書は、研究領域をさらにその前後の時代へと拡大し、庭園史の流れを追って前書の跡付けを試みると同時に、英国近代史、特に政治史の再検討をも図ろうとする力作である。以下、章を追ってその内容を紹介しよう。

第一章は、中世からルネサンス期にかけての庭園論の要約であり、また、問題提起の章でもある。中世の封建領主の城や教会の庭は、『ばら物語』『カンタベリー物語』